

<文化財の種類 有形文化財（建造物）>

<p>名 称</p>	<p>にほんきりすときょうだん おおさかきょうかいほんかん 日本基督教団 大阪教会本館</p> <p>煉瓦造を主とした複合構造、建築面積 467 平方メートル、3 階建、塔屋及び門柱付、洋瓦葺</p> <p>附：長椅子など調度類 92 点、2 階半円窓旧ステンドグラス一具（5 枚）</p>
<p>員 数</p>	<p>1 件（1 棟）</p>
<p>所在地</p>	<p>大阪市西区江戸堀一丁目 23 - 17</p>
<p>所有者</p>	<p>宗教法人 日本基督教団大阪教会</p>
<p>年 代</p>	<p>大正 11 年（1922）</p>
<p>説 明</p> <p>○沿革</p> <p>日本基督教団大阪教会の起源は、アメリカン・ボードの宣教師ゴルドンが始めた英語塾にあるとされ、明治 7 年（1874）5 月 24 日に西区本田の小さな借家である梅本町公会としてはじまった、在阪最古のプロテスタント教会である。その後、明治 10 年（1877）、明治 14 年（1881）、明治 21 年（1888）と教会活動の進展により会堂を移転し、教会員が 300 人を超えた大正 7 年（1918）には、現在の西区江戸堀における教会堂建設が決められた¹。設計は数多くの教会堂建築を手がけていたヴォーリズ建築事務所に依頼され²、大正 10 年（1921）に着工、翌年竣工した³。</p> <p>○建築的特徴について</p> <p>大阪教会本館は西区土佐堀通りの南に通る江戸堀北通りに南面し、聖堂と大講堂を含む幅 15.4m、奥行き 28.7m、最大高さ約 15m、地上 3 階建て、妻入りの建物と、その北西隅に 4.5m 四方、高さ約 25m の塔屋を付している。南面の妻壁の西側に間口 2.2m の正門を開き、現在、本館の西側には緑豊かな前庭⁴が配され、塔屋 1 階部に開く玄関へと通じるアプローチ空間として使われている。本館北側の背後には鉄筋コンクリート造 3 階建ての教育館が建つ。</p> <p>本館正面は切妻形の煉瓦壁で、中央に御影石の屋根形迫持ちアーチを底にした出入口と、その上部に直径は約 2.4m のバラ窓を配す。このファサードの構成は一見すると簡潔であるが、煉瓦の長手と小口を交互に表すフランス積みを基調にして、ブリック・ワークのさまざまな図柄が折り込まれている。また用いられている煉瓦は均一なものではなく、形状不揃いの焼過ぎ煉瓦を積みあげ、織物のような風合いを感じさせている。30m 余りつづく教会堂側壁の一層目はフラットアーチの矩形窓、二層目は半円アーチ窓、側廊上部にあたる三層目には小さな半円アーチ窓が連なり、その上部にはロマネスク・スタイルの特徴であるロンバルディア・バンドが軒下を飾る。塔屋は 6 層で構成され、宝形屋</p>	

根を架けている。また本館西側に続く正門の門柱も煉瓦造で、建物正面の妻壁と同様、柱頂部など各所にブリック・ワークが施された意匠性の高いものである。

本館内部の主なる諸室として、1階には玄関ホール及び階段、大講堂、2階は250席余りを備えた幅14.5m、奥行き25.5mの聖堂、牧師室などが置かれている。また聖堂は後部にギャラリーを備え、屋根裏まで吹き抜いたオープン・ルーフとなっている。2階の聖堂は身廊と側廊とで構成されるバシリカ式の平面を有し、上部空間には約12mの梁間に7組の木造キングポスト・トラスを架け、それらを支持するブラケットの意匠は、トラス屋根の重量を打ち消すかのように巧みである。内壁面は腰高までを化粧煉瓦積みとし、それより上部を漆喰塗としており、煉瓦の腰壁によって内外の一体感がつくり出されている。聖壇上の大きなラウンド・アーチは力強く、側廊はアーチを連続させることで奥行き感と劇的な光の効果が生まれている。また、聖壇は弓形に張り出すように設けられ、会衆席から聖壇に向かって床がゆるやかに傾斜している。

1階の大講堂は聖堂の直下に位置する大部屋で、集会や教会学校の教室等に用いられている。昭和47年(1972)の改築により、内装は改変されているが、当初の主要構造部材、東西壁面の窓の配置などは保持されている。加えて階段室も本教会にとって重要な空間である。玄関ホールの両脇に設けられた階段は、連続するアーチ形の手摺子によって上昇感を強め、太い親柱が屈曲する階段を力強く分節する。2階の聖堂への入り口であるホールには、ステンドグラスの入る半円形の飾り窓が配されている。階段室はさらにオルガン⁵と会衆席を備えた3階ギャラリーへと通じ、上部にある円形のバラ窓から会衆席へと射しこむ光が、ロマネスク・スタイルの大阪教会の象徴となっている。

なお本館の北側には、かつて1階に図書室等、2階に社交室、3階に畳の日本室を備えた木造の教育館(付属館)が接続していたが、平成元年(1989)に鉄筋コンクリート3階建に建替えられている。

○構造的特徴について

大阪教会本館の構造はその外観からは煉瓦造を想起させるが、部位によって構造材が異なる「複合構造体(mixed structure)」であることが、当初の設計図面および建物調査⁶により明らかになっており、構造設計には米国からの技術援助があったことが伝えられている。次に要点を列記する。

- ・基礎：外壁布基礎は無筋コンクリート、外柱基礎は鉄筋コンクリート造であるなど、無筋並びに鉄筋コンクリート造基礎が併用されている。
- ・柱：柱には鉄骨が採用されている。外柱は基礎から小屋までの通し柱とし、中柱は2階の会堂床を支える管柱としている。柱脚部は鉄筋コンクリートで庇護され煉瓦壁体に納められている。
- ・梁および床：鉄骨柱に架かる梁は鉄筋コンクリート造で、主要鉄筋として米国から輸入したカーンバー(Kahn trussed bar)⁷が用いられている。臥梁も鉄筋コンクリート造で、2階および3階の床部や外周煉瓦壁と繋がるバットレス部に配され、側壁煉瓦頂部の補強効果を高めている。また梁間が最も長大な1階大講堂の天井には、鉄筋コンクリート造の梁を波型鉄板で被覆した防火床⁸が採用されている。
- ・屋根：煉瓦壁頂部の軒桁、母屋部のトラス梁、下屋の垂木は木造である。屋根葺材はセメント瓦とし、現在は洋瓦に葺き替えられている。

以上のように本建物は壁面に煉瓦を用いているが、無筋・鉄筋コンクリート、鉄骨、木といった異種材料の結合が多く、それらを一体として結実させた「複合構造体」であることが特徴である。

○改修履歴について

大阪教会本館における主な改修履歴⁹について簡単にまとめる。

昭和**47年（1972）**の創立**100**周年記念に合わせて、1階大講堂の床面が傾斜床からフラット床に変更され、1階玄関ホール脇の控室がトイレに改修された。

平成元年に本館北側の木造**3**階建ての教育館が、鉄筋コンクリート造**3**階建てに建て替えられた。この改修に合わせて塔屋の基礎部を補強し地盤改良が行われた。また本館2階の半円形飾り窓のステンドグラス¹⁰が入れ替えられた。

平成7年（**1995**）**1**月**17**日に発生した阪神淡路大震災により被災し、地盤の液状化等により聖堂妻壁に亀裂が生じ、塔屋が傾斜するなどの被害を受けた。復旧にあたっては本館の外周基礎部分の地盤改良が行われ、南側妻面と階段室に鉄骨柱を加えることで妻壁が補強され、塔屋内壁に鉄骨柱を添えることで耐震性が向上された。またバリアフリー化に応じるため、1階玄関ホールにエレベーターが設置された。

以上のようにこれまで改修や耐震補強が行われてきているが、全体を通じて煉瓦壁や柱梁や小屋組みなどの主要構造部材は建築当初から変更されておらず、特に教会堂内部を最も特徴づけている2階聖堂の内部空間は建築当初の姿が維持されている。

○本館と一体的に設計・製作された調度類などについて

本教会には、建物と一体として設計・製作された調度類や旧ステンドグラスなどが残っている。

建築当初の調度類¹¹は、2階聖堂内の会衆席の長椅子**71**点をはじめ、聖壇に据えられた椅子¹²**3**点、講壇および3階ギャラリー席や階段室などに配された長椅子**17**点があり、これらの総数は**92**点である。長椅子はオーク材の厚板でつくられており、2階会衆席のものは聖壇の曲線を囲むよう円弧形にデザインされている。また聖壇の椅子は、会衆席と比較して装飾性が高いゴシック調のデザインが施されている。

本館2階の半円形飾り窓には教会唯一のステンドグラスが嵌められており、現在のものは改修によって入れ替えられたものだが、前身のステンドグラス一具（5枚から構成）が別置保管されている。旧ステンドグラスは、繁茂する樹木の中央に白い花が咲く風景が図案となっており、使用されている乳白色のマーブル模様のガラス¹³は米国製のものである。

なお照明器具も建築当初のものがいくつか残っている。聖堂内天井に設置された灯具は、繊細な彫刻が施された鋳造製の金物で吊り下げられている。また階段室の踊り場に設置された灯具はブラケット部分に装飾模様を彫り出したものである。

○評価

大阪教会本館の意匠的特徴は、半円アーチを用いた壁面構成を特色とするロマネスク様式の外観や、バシリカ式平面の聖堂、小屋組みに簡素でかつ力強い印象を与えるキングポスト・トラスが採用されるなど、中世初期に遡る建築様式を用いているところにある。

建築構造は、外観からは煉瓦造に見えるが、柱梁などの主要構造部材に、鉄骨、鉄筋コンクリート等を複合的に活用している点が大きな特徴である。近代日本において大規模建築に用いられた構造の歴史を辿ると、幕末から煉瓦造を主とした洋風建築が数多く建てられ、明治期から大正期にかけて耐

久性や防火性を増すため煉瓦のみでなく鉄骨や鉄筋コンクリートを複合的に用いた「複合構造体」へと発展を遂げるとともに、その材料や施工技術は欧米（特に米国）から輸入された。しかし大正**12**年（**1923**）に発生した関東大震災において、煉瓦を用いた建物の多くが被害を受けことにより、以降構造は鉄筋コンクリート造が主流となり、日本国内で材料や施工技術が独自に発展した。このような歴史的な背景があり、煉瓦造を主とした建造物で現存するものは、大阪府内においても少ない¹⁴。そして関東大震災直前の大正**11**年に竣工した大阪教会は、当時の米国の最先端構造技術を導入した「煉瓦を主とした複合構造体」の、最晩年かつ到達点といえる建築作品に位置付けることができる。

また大阪教会は、ヴォーリズ建築事務所の大規模な教会建築の代表作品としても評価できる。同事務所は戦前期におよそ**140**棟の教会建築を設計し、建築活動の主たる部分をなしている。そのうち、煉瓦や鉄筋コンクリート造といった非木造の大規模な教会堂で現存する作例はいくつかあるが¹⁵、建築面積が**450**㎡を超し、高さ約**25**mの高塔を有する大阪教会本館は、最大規模のものである。

大阪教会本館は建築当初から現在に至るまで、教会の需要や安全性を確保するため、改修や耐震補強が行われてきたが、外観を特徴づける煉瓦壁、本館の骨格である柱梁や小屋組みなどの主要構造部材、内部の意匠的価値が最も高い2階聖堂の空間などは適切に維持されている。また当該建物は聖堂のみならず大講堂の機能が含まれているのが特徴として挙げられる。これは献堂にあたり大阪教会が、礼拝のみではなく地域のため種々の集会など多用途に供することができる教会堂を目指したためであり¹⁶、現在も聖堂と大講堂の機能が保持されている。さらに**1990**年代に再整備された前庭が塔屋**1**階に開く玄関へと通じるアプローチ空間を豊かなものにしており、都市部における教会堂としても見るべきものがある。なお大阪教会本館はすでに平成**8**年（**1996**）に国登録有形文化財として登録されており、建築から現在に至るまで教会員達によって大切に守られている。

以上のように大阪教会本館は、都市部における大規模な教会堂建築であり、その外観に煉瓦壁とロマnesc様式の伝統的な要素を用いているが、建築構造には当時最先端の「煉瓦を主とした複合構造体」が使われており、近代日本における建築構造技術の発展を知るうえで貴重である。また全国に数多くの教会建築を残したヴォーリズ建築事務所における大規模な教会堂作品としても重要であり、総じて大阪府指定文化財としてふさわしい。なお建築当初から使用されている調度類や、別置保管されている旧スタンドグラスは、建物と一体として設計・製作された貴重なものであり、附指定とする。

註

（註1）明治**15**年（**1882**）に大阪教会の牧師として就任した宮川経輝は、現教会堂の建設を推進し、教会活動の進展に大きく寄与した。

（註2）大正**7**年（**1918**）にヴォーリズ建築事務所に設計が依頼され、設計着手から着工まで**3**年を要した。**6**つの計画案スケッチが残されており、長い設計期間中にヴォーリズ建築事務所において様々な計画案が検討されていたことが分かる貴重な資料といえる。設計にあたり作成されたスケッチや建築図面の原図は、現在、株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所が所蔵しており、大阪教会には複写図面が保管されている。

（註3）建築年代は、献堂式の際に配布された記念冊子「大阪基督教会会堂建築記念 大正**11**年6月」による。

（註4）前庭は**1990**年代に一部を煉瓦敷きにするなどの改修が施され、現在の姿となっている。

（註5）3階ギャラリーにはリードオルガンとパイプオルガンが据えられている。リードオルガンは、**Esty Organ company**（米国）の製品で、当社の**1922**年のカタログに掲載されている。建築時に奉献されたものと

- 伝わる貴重な装備といえる。阪神淡路大震災で被災したが、修復され現在も演奏することができる。パイプオルガンは昭和 51 年（1976）に設置されたもので、設置に伴いギャラリーを支持する補強工事が行われた。
- （註 6）大阪教会では歴史を経てきた教会堂の保存対策に向けての建築調査を昭和 52 年（1977）に日本建築学会近畿支部に依頼し、昭和 56 年（1981）に「大阪教会建築調査報告書」が作成された。報告書は教会堂を保存することを前提として、特に構造上の特徴に重点を置いて書かれている。
- （註 7）**Trussed Concrete Steel company**（米国）製の異形鉄筋の種類。大正年間に日本に輸入され使用された。大正 12 年の関東大震災で多くに被害を引き起こしたため、以降使用されていない。なおカーンバーが使われている現存建物には、大谷派本願寺函館別院（国指定／大正 4 年（1915））、山口銀行本館（山口県指定／大正 9 年（1920））などがある。
- （註 8）防火床とは、コンクリートや木造の梁を鉄板で被覆することで防火性を増すための工法である。
- （註 9）大阪教会では創建から現在に至るまでの建物としての歩みを令和 3 年（2021）に「日本基督教団大阪教会建築調査記録」にまとめるとともに、建物の現況図面が作成された。現況図面は、建築当初図面に一部加筆や改変する方法で作図されており、本稿では本調査記録に収録された図面を引用する。
- （註 10）現在のステンドグラスはキリストと羊の図案で、平成元年（1989）にミラノで製作されたものである。
- （註 11）調度類の図面は残っていないが、主に会堂建築記念冊子に掲載されている古写真に写っているものを、建築当初と判断する。
- （註 12）椅子の背もたれの裏側には、献堂にあたり尽力した建築委員長の名が刻まれている。
- （註 13）ステンドグラスに使用されているのは、**Kokomo Opalescent Glass**（米国）製のガラスである。
- （註 14）大阪府内で煉瓦を主とした建造物で現存するのは、北浜レトロビルディング（旧桂隆産業ビル）（国登録／明治 45 年（1912））、高麗橋ビルディング（明治 45 年）、大阪市中央公会堂（国指定／大正 7 年（1918））、川口基督教会（府指定／大正 8 年（1919））、田尻歴史館洋館（府指定／大正 11 年（1922））が挙げられる。
- （註 15）ヴォーリズ建築事務所設計による現存する非木造の大規模な教会堂は、京都御幸町教会（煉瓦造／京都市指定／大正 2 年（1913））、明治学院礼拝堂（煉瓦造／港区指定／大正 4 年（1915））、久留米ルーテル教会（煉瓦造／登録／大正 7 年）、大阪福島教会（RC 造／昭和元年（1926））、神戸ユニオン教会（RC 造／国登録／昭和 3 年（1928））、神戸女学院チャペル（RC 造／国指定／昭和 8 年（1933））、博愛社礼拝堂（RC 造／昭和 10 年（1935））、京都復活教会（RC 造／昭和 11 年（1936））が挙げられる。
- （註 16）「大阪基督教会会堂建築記念 大正 11 年 6 月」の冒頭には、「(前略) 新会堂は独り我が教会の使用に止めず広く之れを我が大阪市民の為に解放し宗教、教育、社会事業等の集會に便し教会本来の使命に向て邁進せんこと之なり。(後略)」とあり、地域に開かれた教会を目指すべきであると記されている。

[参考文献]

大阪基督教会『大阪基督教会 会堂建築記念』1922

大阪基督教会『大阪基督教会沿革略史』1924

日本建築学会近畿支部・日本基督教団大阪教会『大阪教会建築調査報告書』1981

大阪府教育委員会『大阪府近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』2007

独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所『コンクリート造建造物の保存と修復-未来につながる人類の技 19』2020

日本基督教団大阪教会『日本基督教団大阪教会 建築調査記録』2021



日本基督教団 大阪教会本館
外観



日本基督教団 大阪教会本館
聖堂内部



日本基督教団 大阪教会本館
聖堂会衆席



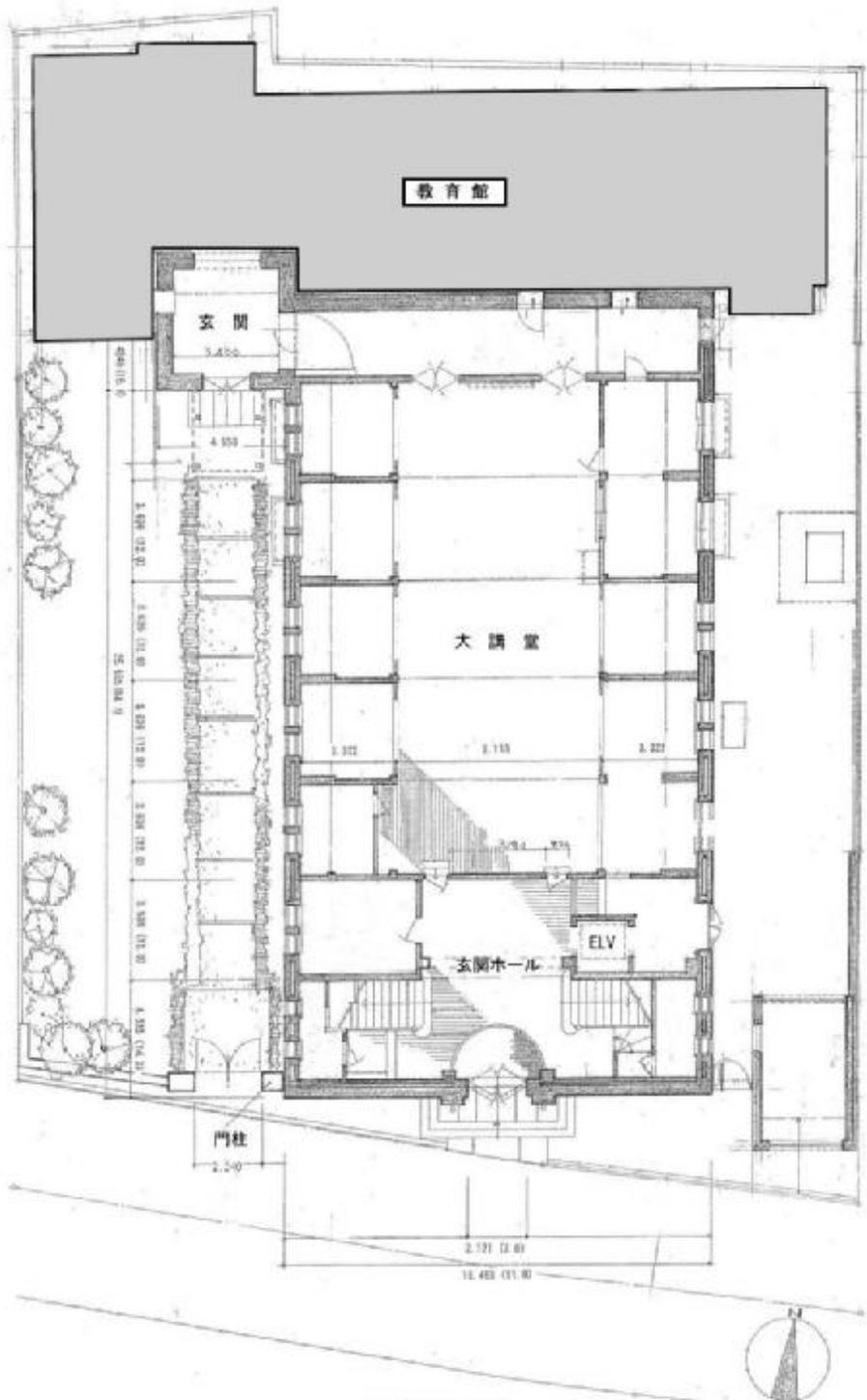
日本基督教団 大阪教会本館
階段室



日本基督教団 大阪教会本館
大講堂

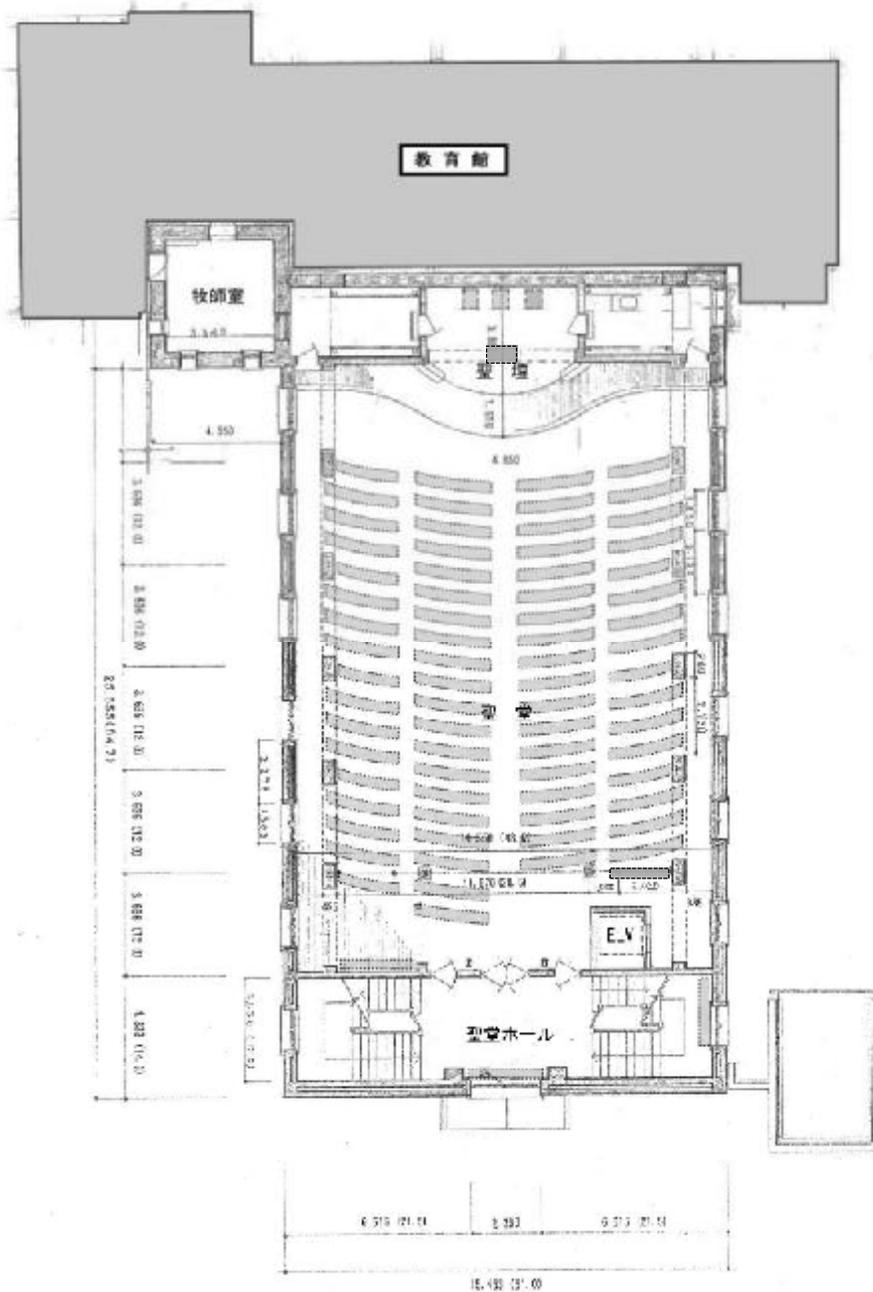


日本基督教団 大阪教会本館
ギャラリー



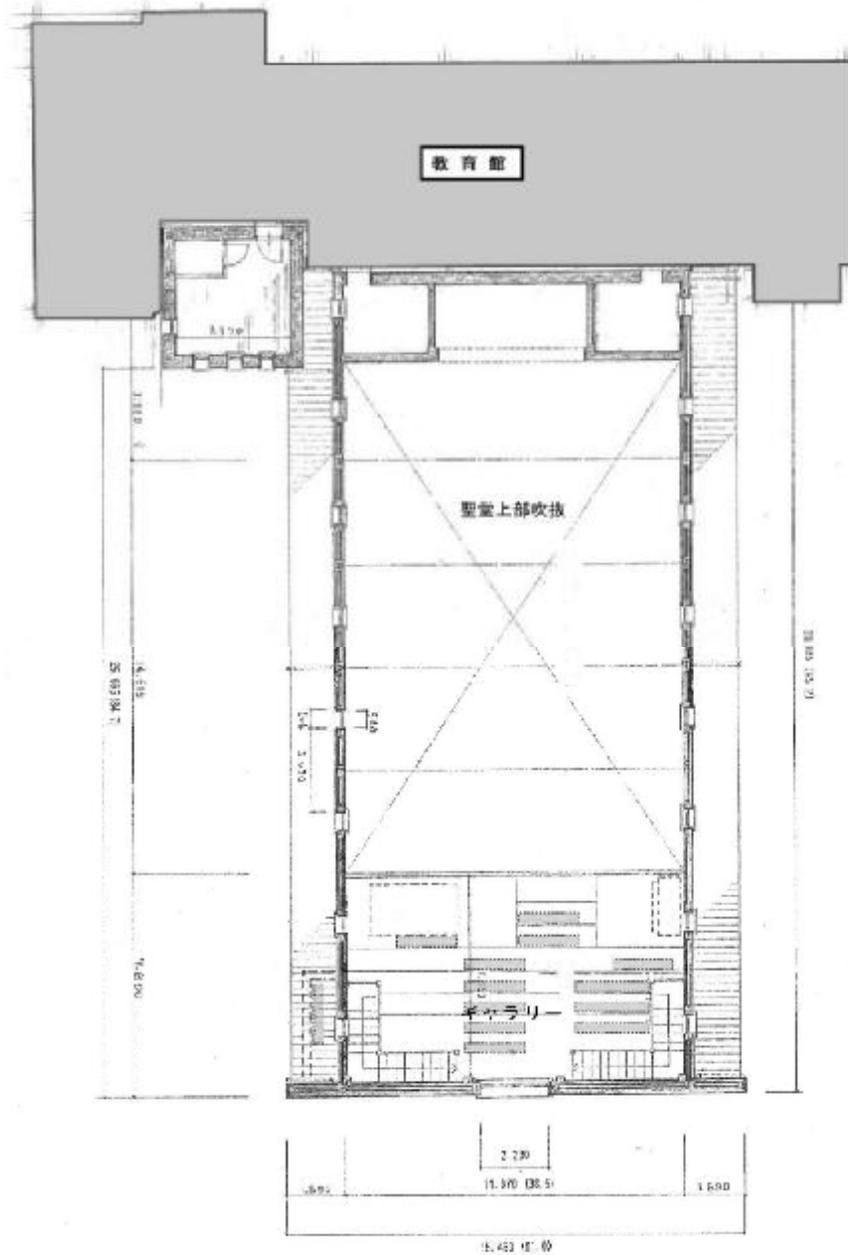
1階平面図

日本基督教団大阪教会「日本基督教団大阪教会 建築調査記録」2021収録の現況図面による



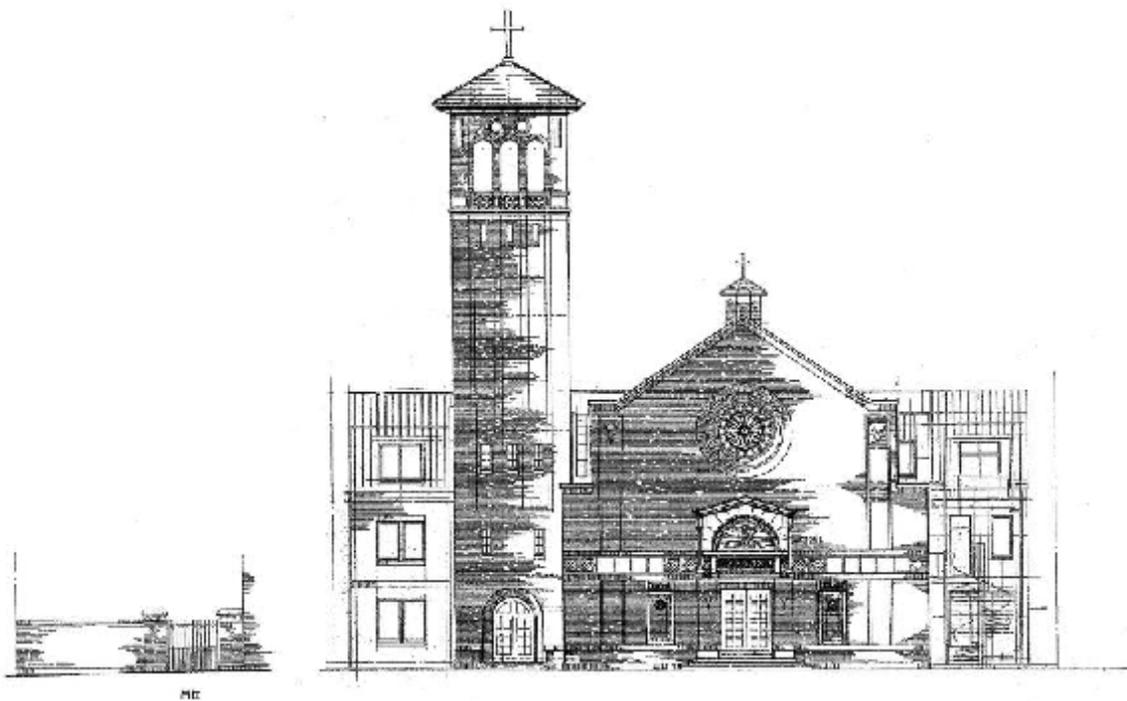
2 階平面図

日本基督教団大阪教会「日本基督教団大阪教会 建築調査記録」2021 収録の現況図面による

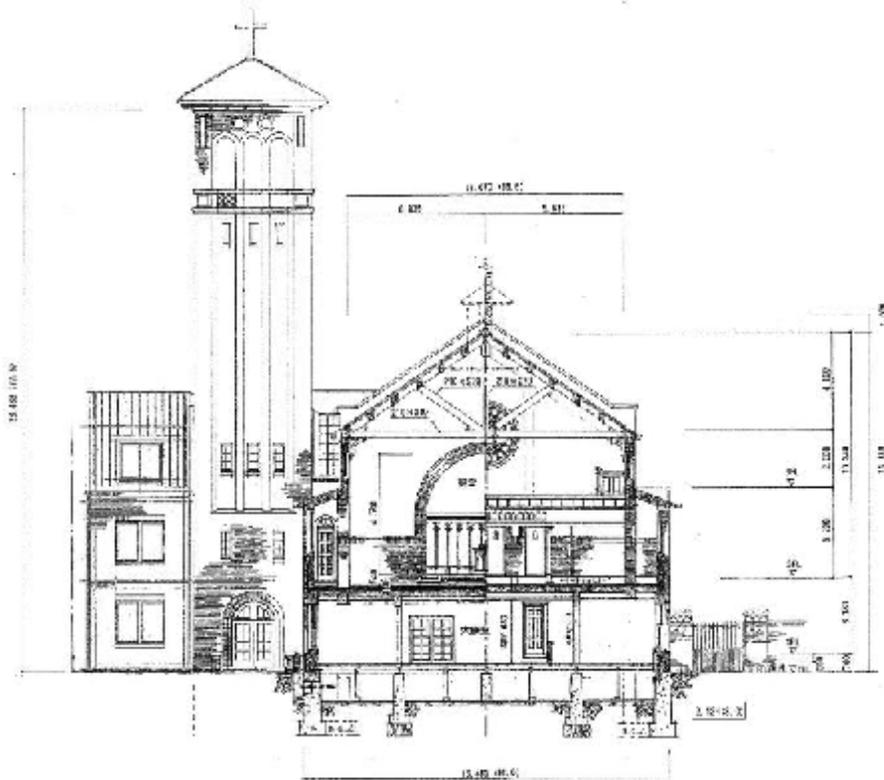


3 階平面図

日本基督教団大阪教会「日本基督教団大阪教会 建築調査記録」2021 収録の現況図面による

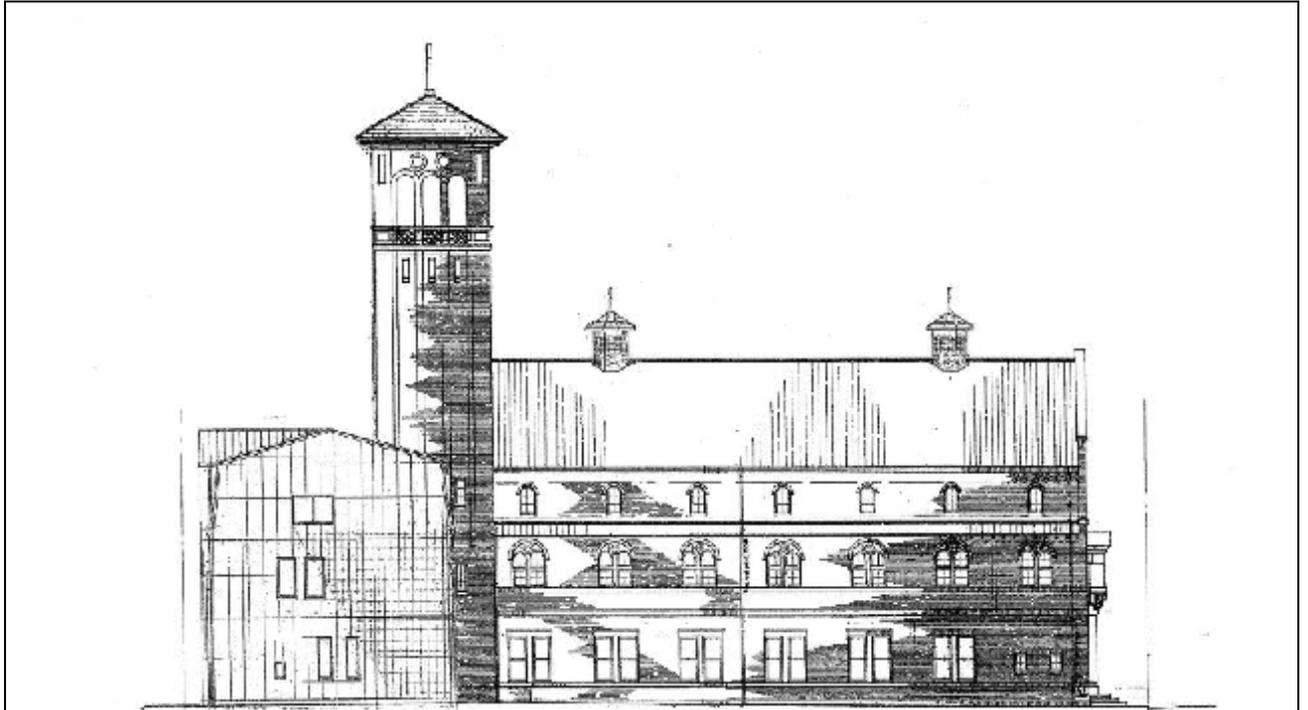


南側立面図

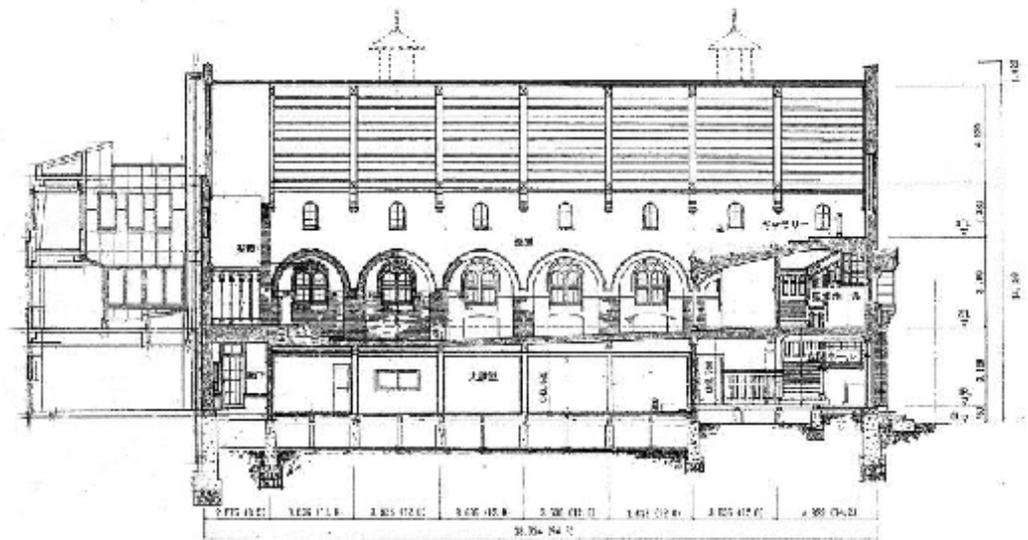


東西断面図

日本基督教団大阪教会「日本基督教団大阪教会 建築調査記録」2021収録の現況図面による



西側立面図



南北断面図

日本基督教団大阪教会「日本基督教団大阪教会 建築調査記録」2021収録の現況図面による